

れる(49年9月償還利付債利回り8月末9.55%、9月末9.63%)。

### 起債状況

(単位・億円、カッコ内純増額)

	39年 8月	9月	前月比	39年10 月見込 み	38年 10月
事業債	187.6 (101.8)	190.1 (111.7)	2.5 (9.9)	195.7 (124.2)	244.6 (121.6)
一般	106.6 (57.8)	108.1 (55.8)	1.5 (-1.9)	110.7 (67.4)	133.6 (70.1)
電力	81.0 (44.0)	82.0 (55.9)	1.0 (11.9)	85.0 (56.8)	111.0 (51.6)
地方債	35.8 (25.4)	37.4 (25.1)	1.6 (-0.3)	38.0 (26.0)	27.0 (25.4)
政保債	131.0 (114.5)	153.0 (101.5)	22.0 (-13.0)	138.0 (115.6)	103.0 (93.1)
計	354.4 (241.8)	380.5 (238.3)	26.1 (-3.4)	371.7 (265.8)	374.6 (240.1)
金融債	874.6 (383.1)	860.9 (341.7)	-13.7 (-41.4)	971.0 (427.5)	861.7 (315.4)
利付	362.2 (264.9)	404.2 (289.3)	41.9 (24.4)	437.0 (328.8)	426.4 (254.7)
割引	512.3 (118.1)	456.7 (52.4)	-55.7 (-65.7)	534.0 (98.6)	435.4 (60.7)

## 実体経済の動向

### ◇8月の生産は特殊要因も加わって徐々に減少

8月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比-1.6%と5か月ぶりに減少を示した。これには、鉄道車両、一般機械におけるこれまでの増加の反動的な落込みに加え、全般に8月の操業日数が休日数の関係ないし夏期休暇採用企業数の増加によって例年より減少したことがかなり影響している。もっともこれらを考慮に入れても、最近における生産の増勢は4~6月に比べいくぶん鈍化傾向を強めてきているように思われる。

8月の生産を特殊分類別にみると、資本財がかなりの減少を示した。これはボイラーなど大型機械の不規則変動による著減や、鉄道車両、化学機械、運搬機械の反動落ちが響いたためであるが、

このほかにも、金属工作機械、標準誘導電動機など見込生産機種が在庫圧力からすでに減産傾向にあり、これらが資本財生産を落着きに向かわせている点も否めない。また耐久消費財でも在庫圧力の増大から、民生用精密機械(8ミリ、カメラなど)、民生用電気機械(卓上扇風機、テレビなど)、自動二輪車、家庭用ミシン、毛糸手編機械など多くの商品が減産傾向を持続した。このような最終需要財生産の落着きを反映して生産財も当月はわずかながら減産となっている。化学(前月設備修理の集中で大幅減産となった石油化学製品の反動増が主因)、繊維(合繊中心)が増加したほかは、各業種とも横ばいないし減少を示した。もっともこれらのうち、非鉄の減産は原料不足によるものであり、紙・パルプの減産は設備修理の集中が影響したものである。

なお、9月の生産(速報、季節変動調整済み)は8月落込みの反動増を主因に、前月比+2.9%の大幅増加となった。前月大きく落ち込んだ電力向け大型機械、化学機械、運搬機械など一般資本財機械が、再び元の高水準に復したことによるほか、輸送機械、耐久消費財の一部、生産財でも増加を示している。ちなみに8~9月の生産をならしてみれば、月率+0.6%の増加にとどまっている。

### 特殊分類別生産動向

(季節調整済み、前期(月)比増減率%)

	38年 7~ 9月	39年 10~ 12月	39年 1~ 3月	39年 4~ 6月	39年 6月	7月	8月
投資財	9.1	4.5	3.9	7.8	4.1	-0.2	-3.6
資本財	7.1	6.0	4.7	9.8	3.4	-0.5	-4.9
同(輸送機械を除く)	9.2	3.2	2.1	6.0	1.0	0.4	-6.6
建設資材	14.2	0.3	3.1	2.1	4.0	1.0	0.6
消費財	2.7	6.4	0.9	1.2	2.8	-0.4	-1.3
耐久消費財	0	8.0	3.8	-0.7	4.0	-2.6	-4.9
非耐久消費財	3.6	5.5	0.7	1.3	1.3	1.1	0.5
生産財	6.1	5.3	4.9	0.8	2.0	1.7	-0.4

(注) 通産省調べ(35年=100)。

次に8月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月比-1.3%と前月に引き続き減少した。耐久消費財は増加したものの、資本財が大幅減とな

り、生産財も徐々に減少した。まず生産財出荷は、化学(石油化学製品の反動増が主因)、石油製品(ナフサ、揮発油)の増加を除き、各業種で軒並み減少をみている。鉄鋼(薄板)、紙・パルプ(洋紙)、窯業(ガラス製品)、ゴム(ラテックス製品、自動車タイヤ・チューブ)、繊維(天然繊維原糸)などの出荷減は、ユーザー・流通段階の仕入態度慎重化を反映したものとみられ、全般に出荷の伸び悩み傾向が強まってきた。また資本財出荷もかなり大幅な減少を示したが、これには電力向け大型機械の完工一巡や、化学機械などの反動落ちによる一般機械の減少のほか、6月、7月にかけて東海道新幹線向けに出荷の集中した鉄道車両が、前月比4割近くも落ち込んだことも大きく影響している。一方、前月大幅な減少をみた耐久消費財は、当月中かなりの増加となった。これは、オリンピックを控えてテレビの出荷が集中したことや、卓上扇風機が8月にはいって残暑の関係から7月の不振をいくぶん回復したことなどによるものである。しかし多くの商品(カメラ、8ミリ、自動二輪車、冷蔵庫、毛糸手編機械など)では引き続き出荷減をみている。この間、建設資材は鉄骨の反動増を主因に増加、非耐久消費財も、秋物繊維二次製品、合成洗剤、写真フィルムなどを中心として、増勢鈍化のうちにも根強い動きを持続した。

なお、9月の出荷(速報、季節変動調整済み)は前月比+3.5%の増加となった。一般資本財機械が前月落込みの反動による出荷集中から大幅増加を示し、またモデルチェンジ完了の乗用車、オリンピック需要期待のテレビ、カメラ、時計などが増加した。生産財も電力向け出荷好調の石油(重油)、石炭鉱業、輸出好調の鉄鋼を中心に増加を示した。

前記のような出荷の伸び悩みを映じて、8月のメーカー製品在庫(季節変動調整済み)は、前月比+2.2%の増加となった。耐久消費財が徐々に減少した反面、他の各財はいずれも増加している。耐久消費財では、電気機械(卓上扇風機、テレビ、

家庭用電気井戸ポンプ)、精密機械(カメラ、8ミリ、時計)、輸送機械(自動二輪車)など、いずれも需要は伸び悩みみであり、したがって製品在庫の減少は、主として生産の抑制がある程度奏効しつつあることの現われと思われる。一方、資本財はかなりの増加となった。脱穀機、精米麦機、動力耕うん機など農業機械部門で豊作による需要見越しもあって、季節的な在庫増しがみられたことも一因であるが、標準誘導電動機など汎用機種の一部で、出荷停滞に伴う荷もたれの在庫が引き続き増加したこともかなり影響している。また建設資材では、亜鉛鉄板、セメント、磨板ガラスなどの在庫が増産を背景に増加を続け、非耐久消費財の在庫も、繊維、化学における出荷を上回る生産増を主因に増加をみた。この間、6月、7月とほぼ横ばいに推移してきた生産財の在庫は、輸出の好調な鉄鋼、化学(肥料)で微減を続けたのを除き、その他多くの業種で増加を示した。このうち、繊維(原糸、合繊織物)、ゴム、紙・パルプなどにおける在庫増は、ユーザー・流通段階の在庫調整進展を反映した面が大きく、これらでは在庫圧力がいくぶん強まっているものとみられる。

なお、9月のメーカー製品在庫(速報、季節変動調整済み)、前月比+1.3%と引き続き増加した。テレビの出荷集中を主因に耐久消費財在庫が

生産・需給動向(鉱工業)

(季節調整済み、増減率は%)

	38年 7~ 9月	39年 10~ 12月	39年 1~ 3月	39年 4~ 6月	39年			
					6月	7月	8月	
生 産	指 数	146.5	154.1	159.5	164.9	168.7	170.0	167.2
	前期(月)比	6.4	5.2	3.5	3.4	2.4	0.8	-1.6
	前年同期(月)比	13.5	19.8	21.3	19.8	21.8	16.9	15.0
出 荷	指 数	144.1	151.0	157.1	161.7	164.6	163.7	161.5
	前期(月)比	5.2	4.8	4.0	2.9	2.0	-0.5	-1.3
	前年同期(月)比	13.6	16.2	19.1	18.0	19.6	13.9	12.2
製 品 在 庫	指 数	171.8	180.0	186.1	192.4	192.4	193.5	197.8
	前期(月)比	3.6	4.8	3.4	3.4	0.7	0.5	2.2
	前年同期(月)比	2.7	5.5	12.8	16.0	16.0	15.9	16.1
	在庫率指数	118.8	118.0	117.5	116.9	116.9	118.2	122.5

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。  
前年同期(月)比は原指数による。

減少したほかは、各財とも増加し、とくに石油(揮発油、灯油)、ゴム、紙・パルプなどの在庫増加が目立っている。

8月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、前月比-0.8%と3ヵ月続けて減少した。繊維原料、製紙パルプ、非鉄鉱石(入手難)などの輸入原材料在庫が引き続き圧縮されたほか、国産製品原材料在庫も、総じて落着き傾向を持続した。

なお、7月の販売業者在庫(季節変動調整済み)は、前月比-0.3%とわずかながら減少した。国産製品原材料をみると、天然繊維織物は微増を続けたが、普通鋼鋼材、石油製品の減少を中心に、大勢としては在庫調整が進んでいるとみられる。

最後に設備投資関連指標の動きをみると、まず8月の一般資本財出荷(季節変動調整済み)は、前月比-6.1%とかなりの減少を示した。これは電力向け大型機械の不規則変動による落込みなどがかなり影響したもので、9月にはその反動から+8.6%(速報)の大幅増加となった。7~9月をならしてみると、見込生産機種種の減少傾向を主因に、増勢がかなり鈍化してきたことは争えない。

この間、8月の機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)は、前月比+2.4%の増加となっ

#### 需要関係の指標

	38年		39年		39年	
	9月	12月	3月	6月	7月	8月
素原材料在庫	111.6	112.8	115.6	113.6	112.2	111.0
(在庫率)	(84.5)	(80.6)	(81.7)	(77.9)	(76.2)	(77.3)
うち輸入分	118.5	116.1	116.6	117.3	116.1	112.7
(在庫率)	(84.3)	(75.4)	(78.5)	(79.1)	(75.6)	(74.3)
製品原材料在庫	120.7	128.5	132.6	136.1	136.3	136.7
(在庫率)	(85.4)	(85.0)	(86.3)	(85.9)	(86.6)	(83.3)
販売業者在庫	154.5	160.7	168.6	173.6	173.0	
	38年	39年	39年	39年		
	10~12	1~3	4~6	6月	7月	8月
	月平均	月平均	月平均			
機械受注(海運を除く民需)	630	701	661	617	625	622
(同季節調整済み)	(699)	(642)	(710)	(636)	(672)	(688)
機械販売(船舶を除く)	883	1,020	952	981	1,023	1,027
(同季節調整済み)	(918)	(1,002)	(997)	(957)	(1,104)	(1,038)
資本財出荷(輸送機械を除く)	159.1	165.8	174.2	175.8	175.7	164.9

(注) 在庫、出荷は通産省調べ、季節調整済み指数(35年=100)。

機械受注、販売は企画庁調べ127社分、同季節調整は本行統計局センサス法による。

たが、これは一部大手鉄鋼メーカーの圧延設備大口発注などが影響したもので、ならしてみれば、高水準のままほぼ横ばい状態とみられる。業種別にみて、化学、紙・パルプ、鉄鋼(特殊鋼)などからの受注は比較的堅調であるが、その他業種からの新規受注はいくぶん落ち込んできており、また一箇所集中した電力業からの受注も一巡して、全体に落着き傾向がやや強まったようである。ちなみに法人企業投資予測調査(企画庁調べ)によって39年度下期の全産業設備投資予測額をみると、上期比+2.4%の微増にとどまっており(上期実績見込み前期比+6.8%、計画達成率、93.8%)、下期の設備投資はかなり落着き傾向を示すことが見込まれている。

#### ◇商品市況、軟弱商状続く

9月から10月前半にかけての商品市況は、商品により依然区々ながら、繊維、鉄鋼などの主力商品が軟化を続けたのをはじめ総じて活気に乏しく、地合い全体の軟弱さがやや目立った。ただ海外市況の高騰と供給不足を背景に非鉄、化学関係では、依然堅調が続いているがこれらでも、市況上伸力はやや薄れたとの感がある。

商品別の動きをみると、繊維はそ毛糸を除き、軒並みじり安商状を続け、とくに綿糸、人絹糸の一段安が目立った。これは内需の伸び悩みによるほか、とくに綿糸などについては、紡績筋の増産を背景とした供給面の圧迫も大きく響いている。鉄鋼では、線材製品が引き続き小戻したものの、条鋼類は、増産の反面間屋・実需筋が先安感などから買見送り態度を強めているため、中形形鋼を中心に反落商状を続け、また薄板も依然在庫圧迫が強く続落を示した。このほかくず鉄でも、こうした鋼材市況の軟弱にひかれて、若干軟化がみられはじめた。他方非鉄では、さすが海外市況の高騰から、一段と上げ足を強めているほか、銅も9月後半にいくぶん騰勢に落着きがみられたものの、その後やはり海外高を主因に再びじり高に復し、また最近高値修正安をみていた鉛も、輸入玉がかなり消化されたこともあり、10月にはいって

再び底堅い動きを示しはじめた。もっとも、銅、鉛とも実需の実勢がとくに強まっているわけではなく、海外市況が高騰している割にはひところのような上伸力がみられなくなっている。また亜鉛は国内の増産態勢が整いつつあることや輸入玉の手当が比較的順調なこともあって依然高値修正を続けている。

その他の商品についてみると、化学では化学肥料が国際的需給ひっ迫を映じて堅調を持続、硫酸など基礎薬品類でも、小口物中心にむしろ若干の値上げが実施されている状況にある。また燃料でも、石炭、C重油は需給引き締まりから強含みを続けているが、白油系の石油は、ここへきて軟化の度合いが強まった。建材は、セメントが一時期下げ渋りをみせたものの、これも10月にはいってからは、市況対策の行きづまりなどから再び軟化に転じ、木材も上伸力なく保含いに推移した。一方紙も秋需に目立ったものなく給じて不ぞえ商状を続けている。なお、食料では、雑穀が北海道の凶作から9月末来急騰し波乱商状を呈しているが、砂糖は依然地合い軟弱を改めなかった。

このように最近の商況は、一部には海外高の影響や供給面の制約などから引き続き堅調ないし強含みを呈しているものもあるが、主力商品の軟調持続をはじめ、季節的需要期を迎えたわりに全般に頭重さが増しつつあることは否定できない。こうした背景として、一つには、現実の生産増加や生産余力の存在など、供給サイドの要因が依然尾をひいていることが指摘される。たとえば、合繊、セメントをはじめ白油系の石油などの軟調持続は増産に伴う需給の不均衡によるところが大きく、また綿糸、スフ、そ毛糸などでは繊維新法の施行による先行き増産懸念が弱気をもたらしめている。鉄鋼についても、供給力の増大を背景としたメーカーの増産体勢が在庫圧迫をいわば慢性化させつつあり(薄板)、また市況の好転が直ちに中小メーカーの増産ないし大手筋の生産再開を誘発して市況の反落を招く(条鋼)といった状況となっている。

しかし第2に、こうした供給面の問題と並んで、やはり金融引締まりの影響を否定することができない。企業の金繰り悪化の程度には業種、規

### 卸売物価指数の推移

(単位・%)

	引解除後 37/11~ 38/11	引締め後 38/12~ 39/9	最近の推移							
			39年			9月			10月	
			7月	8月	9月	9月上旬	中旬	下旬	10月上旬	
総平均	+ 3.7	- 0.8	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.2	- 0.1	+ 0.1	保合	
食料	+ 9.2	- 4.1	- 0.3	- 0.2	+ 0.7	+ 0.3	- 0.2	+ 0.4	保合	
繊維	+ 11.1	- 5.0	- 0.2	- 0.4	- 0.5	- 0.2	- 1.1	保合	- 0.3	
鉄鋼	+ 4.2	+ 0.2	+ 0.9	+ 0.9	- 0.2	- 0.1	- 0.1	- 0.4	- 0.3	
非鉄	+ 1.1	+ 13.6	+ 0.5	+ 2.5	+ 4.1	+ 0.7	+ 1.7	+ 0.5	+ 1.0	
金属	+ 0.2	+ 2.7	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.1	+ 0.3	
機械	- 1.4	- 0.6	保合	保合	保合	保合	保合	保合	- 0.1	
石油・石炭	+ 0.8	- 0.2	+ 1.2	- 0.5	- 0.1	保合	- 0.1	+ 0.3	- 0.1	
木材	+ 3.6	- 1.3	+ 0.4	+ 0.5	+ 0.9	+ 1.4	- 0.7	+ 0.1	+ 0.6	
窯業	- 0.2	- 0.6	- 0.3	+ 0.3	保合	保合	保合	保合	- 0.4	
化学	- 0.2	+ 1.9	保合	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.3	保合	保合	+ 0.2	
紙・パルプ	+ 6.4	+ 3.2	+ 0.2	- 0.1	- 0.2	- 0.1	保合	- 0.1	+ 0.3	
雑品	同水準	- 0.4	+ 0.2	保合	+ 0.5	保合	+ 0.3	+ 0.4	+ 0.4	
工業製品	+ 2.9	- 0.9	保合	+ 0.1	+ 0.1	保合	- 0.1	+ 0.1	保合	
非工業製品	+ 6.3	- 0.5	+ 0.3	+ 0.5	+ 1.2	+ 0.7	- 0.4	+ 0.3	+ 0.2	

模などによりなおかなりの格差がみられるものの、繊維、鉄鋼、非鉄、木材、紙など多くの品目において、問屋筋の手当態度がかなり慎重化しているのは、市況先安感のほか金繰り難がかなり影響しているとみられる。関連需要業界からの引合い自体についても、このところ弱電、建設部門からの大口発注の伸び悩み(薄板、条鋼類)、機屋の糸消費量の減退(各原糸)、企業の広告費削減に伴う需要減退(印刷紙)、製糖、製粉部門の秋需停滞による引合い不活発(産業用紙)などの動きがみられるが、これらにも金融引締めが直接、間接に影響を与えているものと考えられる。

9月の本行卸売物価は、前月比+0.4%と3か月間続騰を示した。これは、非鉄(主として故銅、すず地金)が大幅続伸を示したほか、食料品(肉、鶏卵、雑穀)、木材(とくに良質材)などが引き続き値上がりを見ることが大きく響いたためであり、繊維は原糸、織物を中心に続落、鉄鋼も条鋼類、薄板の軟化を中心に4か月ぶりに反落に転じた。なお、10月上旬の卸売物価は、非鉄、木材が引き続き上伸を見ただけのほか、紙(チリ紙、薄葉紙など)、化学製品に若干上昇がみられたが、反面、繊維、鉄鋼は続落、窯業製品、機械器具も軟弱を示し、結局保合いとなった。

9月の本行小売物価(東京)は前月比+1.4%と続騰(除く生鮮食品も+1.5%と上昇)した。これは、秋冬物衣料の季節高による繊維品の上昇のほか、魚介、肉、卵などの季節的需要増による食料品の値上がり主因で、このほか雑品、機械器具が工賃高から、燃料も需要期入りからそれぞれ若干の上昇をみた。

一方、消費者物価指数(東京)も前月比+0.6%(除く季節商品では+0.5%)とやや大幅な上昇を示した。小売物価同様被服の値上がりが目立ったほか、食料品も生鮮食品を中心に引き続き上昇しており、また家賃地代、自由料金も引き続き根強い上昇を示している。

9月の本行輸出物価は、前月比-0.2%と反落を示した。繊維(原糸、綿織物、スフ織物など)が

国内市況の軟調を映じて下落したのが主因であり、鉄鋼は米国よりの引合い好調、また化学肥料は東南A向け高値成約にささえられ引き続き上昇をみた。一方、輸入物価は前月比+0.2%と8か月ぶりに若干ながら反騰を示した。これは、主として非鉄金属が続伸したことによるものであるが、これまで顕著な落勢を示した食料品も、粗糖の続落を別として大豆、とうもろこしが減収予想高から堅調となったため、下げ幅が鈍化した。このほか、生ゴムもマレーシアの政情不安、ソ連の買付け活発化に伴い上昇を示した。

#### 消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位:%)

		対前年度比 上昇率		最近の推移			最近月 の前年 同月比
		37年度 平均	38年度 平均	39年 7月	8月	9月	
消 費 者 物 価  (東京)	総 合 (季節商品 を除く)	+ 6.6	+ 7.2	- 0.1	+ 0.1	+ 0.6	+ 4.3
		+ 5.9	+ 7.0	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.5	+ 4.3
	食 料	+ 7.2	+ 7.9	- 0.3	+ 0.2	+ 0.4	+ 3.8
	家賃地代	+ 3.7	+ 10.6	+ 0.2	+ 0.8	+ 1.7	+ 9.7
	公共料金	+ 6.7	+ 5.3	保合	保合	保合	+ 3.1
	自由料金 その他商品	+ 14.7	+ 18.2	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.2	+ 10.4
		+ 2.9	+ 2.6	+ 0.1	- 0.1	+ 1.4	+ 2.8
	被 服	+ 5.9	+ 5.6	+ 0.2	+ 0.5	+ 2.0	+ 2.6
	光 熱	+ 1.3	- 0.1	- 0.1	保合	保合	+ 0.2
	住 居	+ 3.0	+ 4.5	- 0.3	+ 0.1	+ 0.7	+ 4.2
	雑 費	+ 7.9	+ 8.4	+ 0.1	保合	保合	+ 5.9
本 行 小 売 物 価	総 平 均 (生鮮食品 を除く)	+ 3.1	+ 4.5	+ 0.5	+ 0.2	+ 1.4	+ 0.4
		+ 2.7	+ 4.6	保合	保合	+ 1.5	+ 0.9
	食 料	+ 3.3	+ 6.3	+ 1.1	+ 1.2	+ 0.2	+ 2.5
	織 維	+ 3.3	+ 4.3	- 0.3	- 1.5	+ 5.8	- 4.2
本 行 輸 入 物 価	輸 出	- 1.9	+ 2.7	- 0.2	+ 0.1	- 0.2	+ 1.2
	輸 入	- 3.1	+ 4.4	- 1.2	- 0.1	+ 0.2	- 0.1

#### ◇経常収支の黒字状態続く

9月の為替収支は、経常収支が前月に引き続きかなりの受取超過になったため、短期資本の逆調を主因とする資本収支の赤字にもかかわらず、総合収支で12百万ドルの黒字となった。経常収支の黒字は、主として輸出の好調持続に基づく貿易収支の大幅受超によるもので、貿易外収支ではガリ

オア・エロア債務利子の支払もあって赤字幅が前月よりも拡大した。最近3、4か月の貿易収支(季節調整済み)の推移をみると、輸出が急増した一方、輸入が若干水準を下げたことから、黒字は6月の20百万ドル程度から8月の80百万ドル強まで順調に拡大した。しかし、当面輸出はなお順調であるとしても、輸入にはすでに若干の増加傾向が現われており、したがって、貿易収支が今後8月のような大幅黒字状態を続けるとみられることは困難と思われる。ちなみに9月の黒字は12百万ドル程度に縮小している。なお、資本収支は32百万ドルの出超となった。長期資本の黒字がガリオア・エロア債務の返済から小幅にとどまった上、短期資本は輸出手形の買増増加、輸入ユーザンスの減少などから前月を上回る赤字となったためである。

## 為替収支

(単位・百万ドル)

	39年			39年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
輸出	450 (380)	512 (429)	578 (461)	571 (454)	584 (468)	580 (461)
輸入	543 (404)	549 (450)	507 (471)	537 (484)	484 (488)	501 (440)
貿易収支	△93 (△25)	△37 (△21)	71 (△10)	34 (△30)	100 (△20)	79 (21)
貿易外収支	△36 (△21)	△37 (△30)	△39 (△32)	△35 (△25)	△35 (△38)	△46 (△35)
経常収支	△129 (△46)	△74 (△51)	32 (△42)	△1 (△55)	65 (△58)	33 (△14)
長期資本収支	23 (22)	42 (59)	28 (41)	22 (41)	35 (62)	25 (21)
短期資本収支	99 (28)	42 (2)	△54 (10)	△69 (△8)	△36 (52)	△57 (△15)
資本収支	122 (50)	84 (61)	△26 (51)	△47 (33)	△1 (114)	△32 (6)
誤差	△14 (3)	△30 (3)	△5 (△7)	26 (3)	△52 (△30)	11 (5)
総合収支	△21 (7)	△20 (13)	1 (1)	△22 (△19)	12 (26)	12 (△3)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

9月の輸出は、前年同月に比し為替+26%、通関+19%と従来に引き続き好調であった。商品別の動きを通関で見ると、鉄鋼、船舶、マシン、合繊などが相変わらずよく伸びているほか、水産

品、衣類、玩具なども比較的好調である。

信用状、認証をみても前年同月に比べてそれぞれ20%および27%増加しており、輸出は当面なお高水準を持続するとみられる。輸出先別では各地域向けとも順調であるが、とくに米国向けの増加が目立っている。ただ、ここ数か月の信用状の動きからみると、高水準とはいっても、ひとところに比べれば増勢がかなり鈍ってきている。すなわち、信用状の前年同期比増加率は、1~4月平均の14%から5月には20%に上昇した後、実勢横ばい状態(註)となっており、また、季節性を除いた実勢でもほぼ同様の傾向がうかがわれる。

(註) 6月(+35%)は前年同月が不振であったため、また7月(+29%)は主として米国向け水産品が例年より早く買い付けられたことや米国向け鉄鋼が集中したことのためそれぞれ実勢以上の増加を示したと思われる。

## 輸出認証の内訳

(単位・百万ドル)

	39年			39年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
繊維	107 (+14)	121 (+21)	131 (+15)	141 (+20)	122 (+3)	130 (+24)
化学品	28 (+14)	35 (+19)	35 (+28)	38 (+36)	32 (+11)	34 (+39)
金属	81 (+2)	104 (+27)	118 (+41)	115 (+31)	116 (+41)	124 (+52)
機械	156 (+39)	166 (+42)	200 (+30)	206 (+39)	197 (+28)	197 (+23)
雑品	31 (-5)	39 (+4)	47 (+12)	49 (+11)	47 (+5)	45 (+21)
合計	493 (+19)	552 (+25)	632 (+26)	653 (+30)	617 (+21)	627 (+27)
米国	135 (+15)	162 (+21)	193 (+31)	196 (+31)	188 (+24)	195 (+39)
アジア	118 (+10)	128 (+17)	125 (+6)	127 (+6)	120 (-1)	127 (+13)
欧州	69 (+35)	70 (+29)	67 (+14)	70 (+13)	73 (+35)	59 (-5)

(註) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%),各期月平均。  
アジアはインド、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。  
欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

9月の輸入は、前年同月に比べ、為替+14%、通関+15%となり前年比増加率では前月(為替-1%、通関+3%)よりかなり上昇した。季節調整済み額で見ても、前月に比し為替、通関ともそれ

ぞれ70百万ドルおよび50百万ドル程度増加しており、春ごろ以来大勢として微減傾向にあった輸入は、ここへきて再増傾向に転じたものとみられる。商品別では、食料が砂糖、小麦の減少から低水準にあるほか、機械も落ち着き状態を続けているが、原材料は、5、6月ごろを底に増加きみとなり、当月は石油、一部の金属原料を中心にかなり水準を上げた。最近におけるこうした原材料輸入の増加は、主として4～6月における在庫圧縮の反動によるとみられるが、このほか国内生産活動が全体としてはようやく落ち着ききみとなってきたものの、石油、鉄鋼など輸入に関連の深い業種では依然根強い生産基調が続いていることによるものとみられる。

先行指標をみても、信用状、承認とも対前年同月比13～14%増と漸増傾向が続いている。今後とも、前記のような原材料の増加傾向のほか、今まで輸入減少に大きく寄与してきた原糖価格の下落や内麦減収に伴う小麦輸入の減少など、特殊要因の剝落の影響が小さくなるため、食料総体の輸入も再増する公算が大きくなるので、生産の基調に大きな変化が生じない限り輸入の漸増は不可避とみられる。

## 輸入承認(通産省調べ)品目別内訳

(月平均、単位・百万ドル)

	39年			39年		
	1～3月	4～6月	7～9月	7月	8月	9月
食料	108 (+46)	95 (+6)	93 (+6)	86 (+0)	83 (-0)	110 (+16)
原材料	298 (+9)	279 (-6)	320 (+8)	318 (+5)	302 (+3)	340 (+18)
原綿	37 (-17)	28 (-11)	34 (+14)	41 (+22)	21 (-17)	40 (+32)
原毛	33 (+4)	26 (-15)	27 (+3)	29 (+0)	22 (-8)	30 (+16)
鉄鉱石	21 (+11)	26 (+11)	26 (+7)	28 (+13)	26 (+12)	23 (-3)
くず鉄	15 (+37)	15 (-23)	21 (-3)	21 (-14)	22 (+14)	21 (-6)
木材	27 (+5)	25 (-23)	34 (+22)	35 (+32)	31 (+1)	35 (+38)
石油	69 (+20)	59 (+17)	65 (+30)	56 (+21)	70 (+40)	68 (+10)
化学製品	41 (+34)	33 (-4)	38 (+4)	40 (+25)	37 (+0)	38 (-9)
機械	68 (-5)	68 (+40)	55 (+3)	52 (-1)	67 (+31)	47 (-17)
鉄鋼	12 (+125)	12 (+70)	15 (+117)	13 (+67)	13 (+150)	18 (+152)
その他	35 (+71)	42 (+47)	43 (+25)	44 (+31)	44 (+43)	41 (+7)
合計	562 (+18)	529 (+5)	564 (+10)	552 (+7)	546 (+9)	594 (+13)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率%。4月以降は計上方式が変更されたので、それ以前の計数と連続しない。